

独立行政法人国際協力機構九州国際センター (JICA 九州)
平成 21 年度高校生国際協力実体験プログラム報告書

【事業の結果概要】

九州 7 県の高校から 28 校の応募があり、選考の結果 19 校、計 104 名(生徒 84 名、教員 20 名)が本プログラムに参加した。事前学習として、JICA 事業の紹介、また、参加する生徒の「国際協力」に関するイメージをウェビングにより記述し、プログラムの当日に持参するようにした。

国際協力実体験プログラムの第 1 回目は 7 月 29 日から 7 月 31 日、第 2 回目は 8 月 5 日～8 月 7 日にかけて JICA 九州において 2 泊 3 日の日程で行われ、開発教育ワークショップ、青年海外協力隊の体験談、JICA 事業による留学生(大学院)との交流、途上国の料理体験、青年海外協力隊活動プログラム体験等を行った。

生徒、教員に対するアンケートの結果からは、ほぼ全員がプログラムに対して満足していることが伺えた。また、プログラム終了時に再び行った、「国際協力」に関するウェビングの変化から、参加者が開発途上国の抱える問題、国際協力についての関心・理解を深める機会となったことが伺えた。

なお、当該プログラムで経験した内容を、学校祭、課外活動発表会等において生徒から発表し、参加者以外の生徒に対して自らの経験を共有しようという試みも行われ、本事業の効果が参加者のみならず、周囲の生徒、父兄への影響も与えるようになりつつあることが伺えた。

【アンケート結果】

(1) プログラムの内容は期待に対しての満足度は何パーセントでしたか(有効回答数 100 件) ?

	単位:%					
満足度	50～60	60～70	70～80	80～90	90～100	100以上
人数	4	2	5	10	17	62

約 8 割の参加者がほぼ期待どおり、若しくは期待以上の満足であったと回答している。

(2) どのプログラムが最も印象的でしたか(有効回答数 108 件) ?

	単位:人								
プログラム名	アイスブレーク	自己紹介	活動体験談(ワークショップ)	アフリカンな夕食	クバーラ	留学生との交流	活動計画作り	ニジェールとのTV会議	活動計画発表
人数	2	2	4	12	14	27	43	10	4

約 5 割の参加者が青年海外協力隊の活動作りが印象的であったと回答している。

添付資料 平成 21 年度高校生国際協力実体験プログラム概要、及び詳細内容

添付資料

平成 21 年度高校生国際協力実体験
プログラム概要、及び詳細

高校生国際協力実体験プログラム概要

・事前学習

1. JICA の活動を紹介
2. 「国際協力」をテーマとしたウェビング
各県国際協力推進員が各校へ訪問し、実施

・当日プログラム

第1回目：7月29日(水)～7月31日(金)

第1日目<7月29日(水)>

- 13:30～14:00 受付開始
14:00 開会・オリエンテーション
14:10～14:30 JICA 事業紹介
14:30～15:10 アイスブレイク
15:10～15:25 休憩
15:25～16:15 学校紹介&自己紹介タイム(各校3分程度)
16:15～16:45 青年海外協力隊OV活動体験談
ワークショップ(参加型体験学習)「援助する前に考えよう！」
18:00～18:30 アフリカンな夕食(タンザニアの食事を現地の食べ方で食べよう！)
18:30～19:30 交流夕食会(2階セミナールーム1&2)
希望者は体育館でクバーラ(マダガスカルのスポーツ)をやりましょう！

第2日目<7月30日(木)>

- 06:30～09:00 各自朝食(1階レストラン)
09:00～09:15 アイスブレイク
09:15～11:45 JICA 留学生との交流(カボ・ジ・ア、ミャンマー、ルワンダ、ベトナム)
先生方は、国際理解教育ミニレクチャー(セミナールーム8)
11:45～13:00 昼食(1階レストランなど各自で)
13:00～17:00 青年海外協力隊活動計画作り
17:00～17:30 JICA ネットによるニジェール事務所とのTV交流
18:30～ 夕食(各自)など自由
活動計画作りが終わらなかった班は夕食後も作成。

第3日目<7月31日(金)>

- 06:30～09:00 各自朝食(1階レストラン)
09:00～11:30 青年海外協力隊活動計画発表
11:30～12:15 振り返り
12:15 閉会・記念撮影
12:30 解散

第2回目：8月5日(水)～8月7日(金)

第1日目<8月5日(水)>

- 13：30～14：00 受付開始
14：00 開会・オリエンテーション
14：10～14：30 JICA 事業紹介
14：30～15：10 アイスブレイク
15：10～15：25 休憩
15：25～16：15 学校紹介&自己紹介タイム(各校3分程度)
16：15～16：45 青年海外協力隊OV活動体験談
ワークショップ(参加型体験学習)「援助する前に考えよう！」
18：00～18：30 アフリカンな夕食(タンザニアの食事を現地の食べ方で食べよう！)
18：30～19：30 交流夕食会(2階セミナールーム1&2)
希望者は体育館でクバーラ(マダガスカルのスポーツ)をやりましょう！

第2日目<8月6日(木)>

- 06：30～09：00 各自朝食(1階レストラン)
09：00～09：15 アイスブレイク
09：15～11：45 JICA 留学生との交流(カボ・ジア、ミャンマー、ボネ、ベトナム)
先生方は、国際理解教育ミニレクチャー(セミナールーム8)
11：45～13：00 昼食(1階レストランなど各自で)
13：00～17：00 青年海外協力隊活動計画作り
17：00～17：30 JICA ネットによるニジェール事務所とのTV交流
18：30～ 夕食(各自)など自由
活動計画作りが終わらなかった班は夕食後も作成。

第3日目<8月7日(金)>

- 06：30～09：00 各自朝食(1階レストラン)
09：00～11：30 青年海外協力隊活動計画発表
11：30～12：15 振り返り
12：15 閉会・記念撮影
12：30 解散

・事後学習

- ・学校ごとの取り組み
- ・JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト 2009 応募

プログラム詳細

1日目：7月29日(水)、8月5日(水)

JICA 事業紹介 担当 林田(長崎県 JICA 国際協力推進員)

ねらい：JICA が行う国際協力事業についての理解を深める。

現在の世界の人口、1日1ドル以下で暮らしている人、学校に行けない子どもなどの数を示し、開発途上国の現状について説明しました。続いて JICA 事業概要についての DVD(Guide To JICA:10分)を視聴し、2日目に青年海外協力隊活動計画づくりを行うため、青年海外協力隊の任期、職種、派遣国、活動内容などの説明を行いました。

<参加者からの声(アンケートより)>

全く知らなかった世界の事情や、それに対しどのようなことを JICA が行っているのかわかった。(一回目：生徒)

派遣される国によって、活動する内容や方法が違うことに驚きました。また JICA の色々な面がビデオなどで分かりやすく見られたのでよかったです。(二回目：生徒)

とてもわかりやすく説明いただき理解できました。(一回目：教員)

日本や九州の人口など、身近でイメージしやすい数字を使って説明がありわかりやすかった。(二回目：教員)



アイスブレイク 担当 稲森(福岡市 JICA 国際協力推進員)

ねらい：初対面である参加者の緊張をほぐす

<1回目>

まず、紙に 呼ばれたい名前 学校名(県名) 好きな言葉を書いた自己紹介の紙を用意してもらいました。次に、自由に動き回り、出会った相手の第一印象だけでお互いの血液型を当て、当てられるまでたくさんの人に出会うというゲームを行いました。各血

液型で部屋の4隅に分かれたあと、はじめに用意した紙を使って各グループ内で自己紹介をしました。その後、二人組になり片方が心で念じた強さ(1・2・3の強さ)で握手をし、相手はその強さを当てるといったゲームを行いました。最後は、円になって床に座り、静かに目を閉じ、これからの3日間をイメージしました。

はじめは緊張していた生徒も徐々に打ち解けて、雰囲気も和らいだようでした。

< 2回目 >

まず、紙に 呼ばれたい名前 学校名(県名) 好きな言葉を書いた自己紹介の紙を用意してもらいました。次に、自由に動き回り、出会った相手の第一印象だけでお互いの血液型を当て、当たったら自己紹介の紙を使って自己紹介をするというゲームを行いました。

その後、「ポッチャ」というボールを使うゲームを学校毎に3コートに分かれて行いました。ルールの説明は福岡県立養護学校の生徒にしてもらいました。各コートでの1位を決め、夜のクバーラの時間に3チームでの決勝戦を行いました。

各チーム優勝を目指して盛り上がり、緊張がほぐれ、雰囲気も和らいだようでした。

< 参加者からの声(アンケートより) >

最初はとても恥ずかしかったけれど、あとから少しずつ慣れていきとても楽しくなりました。(一回目:生徒)

自己紹介では少し照れや恥ずかしさがあったが、ゲームでみんなとうまく打ち解けることができた。とても面白かった。(二回目:生徒)

なかなか他校の生徒に声をかけられなくておろおろしている生徒もいましたが、「自分から積極的にいかないと」という気持ちが芽生えたのでは。(一回目:教員)

血液型からコミュニケーションをとるのが興味深く感じた。(二回目:教員)



学校紹介&自己紹介 担当 林田（長崎県 JICA 国際協力推進員）

ねらい：参加校と参加者の相互理解を深める

事前学習時に、3～5分以内で発表する 必ず皆が発話する パワーポイント、写真などは使用しない(手描きの絵、模造紙などは可)という3つの約束を守り学校紹介・自己紹介を作成して来るようお願いをしていたので、それらを各学校に発表してもらいました。発表の順番は当日の受付時にくじを引いて決めました。

各学校とも、その県や地域、学校について、絵や文字、寸劇など個性豊かな表現方法で発表していたので、途中笑いも起き、とてもリラックスした時間の中でお互いに興味を持つことができました。

<参加者からの声(アンケートより)>

どの高校も自分の学校の特色を活かしていたのでよかった。ユニークで発想に富んでいたのが楽しかった。(一回目：生徒)

いろいろと凝った紹介をしてくれたり、意外な一面を発見できたりしてとても楽しかった。(二回目：生徒)

それぞれに様々な工夫が見られた。クイズ形式が印象に残った。(一回目：教員)

どの学校も工夫が凝らしてあり楽しく見ることができました。少し時間がかかり過ぎたこと以外は本当に素晴らしいものになったと思います。(二回目：教員)



青年海外協力隊 活動体験談 担当 橋口（北九州市 JICA 国際協力推進員）

ねらい：協力隊 O G の体験談を通し「青年海外協力隊」を具体的にイメージし、その後の活動計画づくりに生かす。

発表者：橋口恵利子 派遣国：ボリビア 職種：視聴覚教育

< 1 回目 >

ボリビア多民族国の概要説明のあと、視聴覚隊員としての活動、制作したビデオを上映し活動での苦勞などについて話しました。自分の帰国後、ボリビアで作成した絵本ビデオをもとに絵画コンクールが行われ、その作品が日本の展覧会で発表されたことなどの話を通し、協力隊活動は自分が活動する 2 年間だけで終わるものではないということを感じてもらいました。

< 2 回目 >

1 回目のときに時間がかなりオーバーしたため、ボリビア紹介を簡潔に活動紹介を行いました。1 回目とほぼ同じ内容でしたが、最後にボリビアの協力隊活動を紹介したビデオ（新着隊員向けにボリビアでの活動をイメージしてもらうために制作したビデオ）を上映し、協力隊には様々なジャンル、職種の活動があるという紹介をしました。

< 参加者からの声（アンケートより） >

実際に活動することの難しさと、楽しさなどがたくさんあるのだなと思いました。文化の違いや言葉の違いは大変だけどなんとかかなと感じました。（一回目：生徒）

分かりやすかったです。時を越えて影響を与えるのだとか教育と似ていると感じました。（一回目：教員）

自分が知らないところで、こんなことがあるのだと考えさせられた。給食を、1 人分ずつほんの少しだけ分けている場面がとても印象に残った。食べ物はむだにできないと思った。（一回目：教員）

協力隊の活動の一部が想像できるので良い企画です。現地の人との関わりの中で、できることを探していく過程が見えてよかったと思います。（二回目：教員）



ワークショップ 担当 岡（佐賀県 JICA 国際協力推進員）

ねらい：「よりよい国際協力」について考え、翌日の「青年海外協力隊活動計画作り」のヒントとする。また、初対面のメンバーが集まったグループ内での意見交換や活動の「練習」を行う。

最初にグループ分けをし、グループ内での自己紹介（呼んでほしい名前、どこから来たか、最近ハマっていること）を行いました。その後、「時間を守る」「相手と自分を尊重する」というワークショップのルールを確認してから、プログラムを開始しました。

プログラムは開発教育協会出版の教材『援助する前に考えよう』の中の「一枚の看板」を使用し、「寄付を呼びかける看板を見て、自分だったら寄付をするかどうか」「村の状況や寄付を呼びかけた人に関する説明を読んで、その人の活動のいいところと悪いところを考える」「よりよい活動にするためのアドバイスを考える」という3つの点についてグループの中で話し合い、発表をしてもらいました。

初対面のメンバーとの話し合いは、はじめはぎこちない雰囲気もありましたが、次第に緊張がほぐれ、活発な意見を交わしている様子が窺えました。周りの人達と意見を交わすグループ学習の楽しさ、そして、現地の人たちのことを考えた援助の難しさを感じてもらえたようでした。

<参加者からの声（アンケートより）>

とても楽しかったです。普段は全くこのようなことはしないので、他人の意見を聞くことや、自分の意見をしっかりと言うよい練習になりました。（一回目：生徒）

とても考えさせられた。チームみんなの違う意見なども勉強になった。物事は多面的に見ることが大切だと思った。（二回目：生徒）

話の間の取り方、ワークショップの進め方・流れ等、大変スムーズで解りやすかった。活動前に約束を確認する（時間/尊重）など様々なところで聞き手を惹きつけるチップを教わりました。（一回目：教員）

実際に別々の学校同士で意見を出し合うので、難しいだろうなと思っていましたが、実に面白いシチュエーション（物語）の設定で、引き込まれました。「自分だったら動行動するのだろう」この主体的な思考は今から絶対に役に立つだろうと思う。（二回目：教員）





アフリカンな夕食 / 交流夕食会 担当 中西（宮崎県 JICA 国際協力推進員）

ねらい： 食を通して、異文化に飛び込んだ際の複雑な思いを体験させる。

立食パーティーを通して、参加者同士の友好を深める。

< 1 回目 >

参加者が JICA 共和国 KIUSHIU 村に来たという設定で、ワリナマハラゲ（米と豆という意味）という実際はタンザニア料理であるものを手で食べてもらいました。試食の前に、ちょっとした劇（現地語で村長夫人からの歓迎挨拶とその通訳）などで KIUSHIU 村の人々が参加者の訪問を歓迎していて、心づくしの料理を用意してくれたという場面設定を行いました。高校生にとって、用意した料理と食事の方法が非常に衝撃的であつたらしく、「村長夫人にお礼を言いましょ！ 」という呼びかけには「おいしかったです。」「ありがとうございました。」などと答えていたものの、「本音は？」の質問に、「味気なくて食べられませんでした。」「お箸がほしかったです。」などの回答がありました。参加者は異なる環境に飛び込む際の複雑な気持ちを経験したようでした。

の会場から移動し、JICA 九州：小林所長の日系ブラジル式の乾杯で、立食パーティー形式の各国料理（タコス、インドネシア風焼きそば、トルコ風シチュウなど）を参加者で囲みました。長い一日のプログラムの中でようやくリラックスできる時間となり、賑やかな雰囲気となりました。

< 2 回目 >

「夕食です！」と 1 回目と同様の食事“ワリナマハラゲ”を唐突にグループごとに配りました。やや驚きの声が上がった後に、参加者は興味津津で食事に挑戦し、「おいしい！」完食したグループもありました。みんなが試食している間に、これがタンザニアの料理であり、どんな時に食べられていた料理で、どのように作られているのかななどを説明しました。新しい経験に好奇心が満たされたようでした。

1 回目同様に行き、賑やかな雰囲気となりました。各学校が入り混じって活発に交流が行われました。

<参加者からの声（アンケートより）>

九州村での食事は衝撃的だった、正直一口目で苦しかったが、現地の人笑顔と心情を察すると「絶対食べる！」という気持ちになった。手で米を食べたのが初めてで、最初は抵抗があったけど意外と慣れると食べやすいことが分かった。（一回目：生徒）

これから互いに仲良くしていこうと思っている人から嫌いなものを渡されるような複雑な気持ちを味わえました。（一回目：教師）

手で食べるのはすごく抵抗があったけど、文化を受け入れるってそういう事なのだと改めて知った。（二回目：生徒）

まず、手で食べるということにカルチャーショックを受けました。しかし、慣れてくるとどうすれば上手に食べられるかという風に考え始め、更に味についてもゆっくりと噛むことによって本来の美味しさを再認識しました。（二回目：教師）



マダガスカルスポーツ「クバーラ」(希望者のみ) 田淵OB

ねらい：他学校の人と新しいスポーツを通して仲良くなる。

最初に学校がばらばらになるようにチーム分けをしました。先生チーム、推進員チームも作りました。チーム分けの後、一通りルールを覚えてもらうため反則を確認しながらプレーしてもらいました。その後、各チームでボードを使い作戦タイムをとりました。それから、もう一通りプレーした後、トーナメント制による試合を行いました。最後に優勝チームを表彰して終了しました。クバーラ自体、チームワークが必要とされ得点する事が難しいため、得点した時の感動は大きく結束力を強くする要因になったと思います。

クバーラを終えて他学校の人と仲良くなり、その後のプログラムが円滑に進んだと思います。しかし、初日の拘束時間が長く、「初日から疲れた、ハードだ」といった意見が散見されました。

<参加者からの声(アンケートより)>

マダガスカルの子供も達の元気な様子をDVDで見て、スポーツの大切さを知った。国際協力によって心を豊かにするのも重要な活動の一つだと思う。(一回目：生徒)

最初は簡単だと思っていたけど、すごく頭を使うし奥が深いと思った、海外の人とも仲良くなる機会があってとても貴重な時間だった。(二回目：生徒)

クバーラが一番生徒が生き生きと取り組んでいました。シンプルなルールですがチームワークと戦略が必要ですね。日本チームを作ってマダガスカルの子供もと対戦させたいです。(一回目：教員)

クバーラはもちろん初めてだったけど、思っていたよりすごく楽しかったです。ぜひ学校でもしてみたいと思いました。(二回目：教員)



2日目：7月31日(木)、8月7日(木)

アイスブレイク 担当 力竹(鹿児島県 JICA 国際協力推進員)



JDS 留学生との交流 担当 橋口(北九州市 JICA 国際協力推進員)

ねらい: JSD 留学生との交流を通し、異文化理解と言葉が十分に通じない外国人の方々とのコミュニケーションについて感じてもらう。

岡推進員による JDS 留学生の制度説明のあと、留学生の自己紹介、引きつづき各留学生がグループに入ってから自己紹介を行いました。

グループでは「手書き写真」を作成、留学生の高校時代の話インタビューし、それを絵にして表すというものでした。高校時代の学校生活、恋愛話、また授業中に考えていた空想のお話を絵に表すというグループもありました。

辞書は使わない(2 回目は留学生のみ使用)というルールのもと、日本語・英語・ジェスチャーや絵や文字を通して、たくさんのことを聞きだそうとする高校生。留学生も日本の高校生に話を聞くと言う事前打ち合わせをしていたため、留学生からも高校生へ様々な質問が出ていました。

最後は時間がなく留学生も色塗りなどを手伝い、ひとつの作品を作ることで交流や協力して作り上げる楽しさなどが生まれたようでした。

作成した内容を各グループ3分で発表し、留学生からもひとこと感想を。「高校生がいろいろ話してくれて楽しかった」「日本の高校生はみんな絵が描けるのでびっくりした」「高校生は想像力が豊か」などの意見が聞かれました。

高校生はコミュニケーションの難しさを感じながら「言っていることがわかった時はすごくうれしかった」と外国人の方々とのコミュニケーションの楽しさを感じたようでした

<参加者からの声(アンケートより)>

初めは戸惑いました。自分の英語力には自信が持てず、身振り手振りの本番ぶっつけ

で挑戦しました。しかし、留学生の人は日本語が上手でなんとか伝わりました。班の人たちはコミュニケーションに慣れてきて英語を次第に使っていき、僕も負けまいと簡単な英語でやり取りをしました。意外にも留学生の人に伝わり、自分の英語力に気づかされました。自分の可能性はもっと広がるのだと思いました。(一回目：生徒)

全然お互いの言葉が分からなくて大変だったが自分の言いたいことが相手に伝わった時は本当に嬉しかったです。(二回目：生徒)

絵を描くことで相手との意思疎通がどれだけできているかが分かったので、とてもおもしろいプログラムだと思った。また辞書や会話集に頼らないで自力でコミュニケーションをとろうとしている所も良かった。(一回目：教員)

普段の学校生活や日常生活では得られない貴重な体験だったと思う。まさに異文化理解。生徒も多くの発見をし、文化、風習の違いを学ぶことができた興味深い活動であったと思う。難点は発表に時間がかかり過ぎていたこと。同時通訳の必要はない。自ら理解しようとして聴く姿勢を持たせるのも一つの教育です。(二回目：教員)



青年海外協力隊活動計画作り 担当 吉田（熊本県 JICA 国際協力推進員）、力竹（鹿児島県 JICA 国際協力推進員）

ねらい：参加者自身が、青年海外協力隊の村落開発普及員として開発途上国に派遣されたと想定して、現地の課題に対する 2 年間の活動計画を作成し、現地の人々にとってよりよい解決方法を考えることを通し、国際協力を行う上で大切な視点に気付かせる。

最初に活動の流れ、活動計画、村落開発普及委員について説明しました。そして隊員の活動場所、ニジェールのサイ村の紹介を行いました。

まず地図でニジェールの位置を確認し、グループごとにサイ村の写真を見てイメージを膨らまし、気づいたこと、日本と違う点などを発表してもらいました。

次に広い場所に移り、サイ村を参加者やスタッフで再現していきました。

村にはどのような人がいるか、どのような仕事をしている人がいるか、力を持っているのはどんな人なのかを考えました。村長や先生、農民、商人、医者、看護師などがあげられ、それぞれ発表者にその役になってもらい、身分の高さをあらかず場所に座ってもらいました。村長は机の上に置かれた椅子に座る、農民は地面に座るなどです。首に、青ペンと赤ペンで役割が書かれたカードをかけてもらったのですが、青ペンで書かれた役割が多いことに気づきました。それは男性を表しており、身分の高い職業のほとんどが男性であるということに興味を示していました。

村の関係者がある程度揃ったところで、その村で起こる出来事をスタッフが寸劇で再現して行きました。イスラム教のお祈り（イスラム教について） 水汲みをする女の子（女の子の家庭での仕事量） 市場での出来事（ゴミ捨て、児童労働） 病院での出来事（医療事情・識字率） 役場の休憩時間、といった場面をスタッフ 7 名と生徒も数名巻き込んで再現しました。それぞれの寸劇には、村の特徴や問題点も織り交ぜました。1 回目はそれらの寸劇の後、もとの席に戻ったのですが、自分たちが協力隊員としてその村に住むという感覚が得られていないように感じましたので、2 回目は寸劇の最後に協力隊員役のスタッフに登場してもらい、村長と話をし、歓迎のダンスをみんなで踊りました。隊員が村の一員として迎えられたという印象を少しは持ってもらえたようです。

席に戻り、配布されたサイ村の概要をグループごとに読み、その後村の良いところ、問題だと思ふところを書き出し、全員で共有しました。他のグループの発表を聞くことで、自分たちが気付かなかった村のいい点、問題点に気づき、理解を深めることができました。

そして、いよいよグループごとに「活動計画」作りが始まりました。各グループで問題だと思ふところを解決するために、または村の良いところを活かしていくために、自分たちなら 2 年間でどんな活動をするか意見が交わされました。初めのうちはぎこちなかった会話や意見交換も、時間がたつに活発に意見が交わされるようになり、グループ全体の意見としてまとめられ、次の日の発表に向けてそれぞれが模造紙に工夫をしながら書いていきました。

計画づくりの途中で、6 月に帰国した飯田 OG に協力していただき、JICA ネットを使っ

て JICA ニジェール事務所との交流を行いました。ニジェールで活動している隊員と JICA 職員が 4 名出席しましたが、まず現地語やフランス語での自己紹介にみな驚いていました。その後ニジェールの村の家にはトイレがないって本当ですか？高校生の中で流行っていることは何ですか？ニジェールで大変なこと、楽しいことは何ですか？など様々な質問が出ました。この交流が、その後引き続き行われた活動計画づくりにも影響を与えていたようです。

<参加者からの声（アンケートより）>

サイ村は問題点がとても多くあれもこれも解決したいと思ってしまって内容がまとまらなかったり、お互い自分の意見が強すぎてかみ合わなかったりして、時間に間に合わなくてとても大変だった。でも、本当に自分の意見を言うことが大切だと改めて思ったと同時に相手の意見も聞き入れる頭の柔らかさも大切だと思った。（一回目：生徒）

アフリカ大陸のニジェール国、サイ村について実際に劇をしてみて本当にわずかですが雰囲気を知ることができました。また、活動計画を作る時、昨日のアイコさんの行動などを踏まえてチームで話し合うことが出来てよかったです。（二回目：生徒）

突然の寸劇をさせる、それも協力隊 OV との合同で具体性（やや実感）を持たせる工夫がよかった。ニジェールという国は生徒にとっても大人にとっても普段は縁遠いが、知らない国だからこそ、既知ではない未知の世界、それも困難があることに気づき、私たちの社会を見つめ直す機会になった。（一回目：教員）

非常に有意義で楽しかった。生徒にとっても、情報をスキャニングする力、想像力を働かせて相手の立場に立って考える姿勢を学ぶこと、チーム内で自分の意見を発言し、同時に他者の意見を聞くことで視野を広げたり、コミュニケーションする姿勢を学べるという、すごく大切な要素が沢山盛り込まれた活動だったと思う。教師である私自身も多くの発見があり、時間が経つのが早く感じられるほど充実していた。ボランティアとは何なのかを深く学べる機会でした。（二回目：教員）





3日目：7月31日（金）、8月7日（金）

発表「青年海外協力隊活動計画」 担当 吉田（熊本県 JICA 国際協力推進員）、力竹（鹿児島県 JICA 国際協力推進員）

ねらい：前日行った『青年海外協力隊活動計画づくり』で作成した活動計画を発表し皆で共有する。

発表に関しては グループ 4 分以内 全員が話す 模造紙に書いてあることだけを読むのではなく、なぜその活動に決定したかなどの経緯も含めて発表する、そして村人へ向けてという決まりを設けました。発表後の質問タイムも 4 分とし、もし質問や意見が出なかったら、推進員が「ベタ褒めカード」「辛口カード」を参加者に渡し、それぞれコメントをもらいました。

また前日に、評価のポイント 論理性 持続可能性 ユニーク性 発表の仕方に加え、発表をする対象はサイ村の住民であるということを伝えていたため、劇を取り入れたり絵本を作成したりするグループもあり、どのグループもそれらのポイントを押さえた、大変工夫された発表となりました。

グループごとに着眼点も違い、自分たちの考えやそのアイデアが村の発展につながるということを、みな自信をもって発表していました。聞いている参加者も、村人になったつもりで質問や意見を言い、大変活気のある発表会になりました。

発表後に、評価のポイントに基づいて参加者及び推進員や JICA 職員が投票を行い、1 位を決定しました。全体の投票数が一番多かった活動と、JICA 関係者からの投票が一番多かった活動にはそれぞれ賞が贈られました。

最後に、実際にニジェールのサイ村で活動していた力竹推進員が、協力隊としての活動、村の様子、活動をしながら感じたニジェールの人々との関わりや思いを話しました。参加者は半日、サイ村のことを真剣に考えてきたこともあって、実際に現地で活動してきた力竹推進員の話に熱心に聞いている姿が印象的でした。

最後にアフリカのイメージを書きました。これは誰に見せるというものではなく、初日に書いてもらったものと共に、一つの冊子にまとめて持ち帰ってもらいました。今回

のプログラムを受けて、自分の中のアフリカへのイメージがどのように変わったのかを感じてもらいました。



★ スポンジボブ 大作戦 ★

① 活動内容
 土地の汚しを減らす砂漠を減らすため、スポンジを利用して木を植える。そしてできた果実で収入を得る!! また、生えた草で多くの動物を飼育する!!

② 活動経緯


③ 5年後の村は...
 木が生えはじめ、草も生えつつ雑草がまし。草を食べて成長した動物が増え、収入も増え。木の植え方も増え、村人は、日々定期的に集まり、紅葉に木も増えている。

△チーム名: とびさん△

- ・ 本村 希代希
- ・ 川端 美咲
- ・ 河野 行恵
- ・ 野田 真由美
- ・ 小野 田省悟



Let's look at!!

! 大人の人でも字が書けない
 書いてある危険が分からない!!

キケン!
 produits chimiques pour agricoles は農薬です。

活動内容
 1. フランス語アの単語についてポスターをつくる。
 ↓
 2. 必要性を説明しつつ広め説明していく。



Giving Information

Ⅰ. 教育に対する親の理解を深める
 ● 保護者向けポスターを作成し、学校で配布

Ⅱ. 情報教育の活性化
 ● 自分たちで学校を体験してもらう
 ● ITVの授業で保護者へ知識を伝える

Ⅲ. 成人識字率を高める
 ● 大人のITリテラシーの向上
 ● 5年後の村

保護者の教育に対する理解が5割増しく、情報教育の活性化が実現された。これにより、成人識字率の向上が実現された。また、ITVの授業で保護者へ知識を伝えることで、保護者の理解がさらに深まった。

THE DRY

乾季
 雨季
 5年後
 15年後

干上がる!!

チンマイン




ふりかえり 担当 林田（長崎県 JICA 国際協力推進員）

ねらい：3 日間のプログラムを振り返り、参加者が自分自身にどのような変化があったかを確認し、次のステップへと繋げる

3 日間、とても慌ただしく過ぎたので、まず目を閉じ、静かに集中して 3 日間の出来事をひとつひとつ思い出してもらいました。その後、事前学習と同じく「国際協力」というキーワードでブレインストーミングを 10 分行いました。

そして、事前学習時に作成したものと比べてどのように変わったか 3 日間のプログラムで考えたこと、感じたこと これからのこと について各学校で感想を出し合った後発表してもらい、「国際協力」という言葉から始まった自分自身の変化を確認・共有し、全プログラムを終了しました。



3日間のプログラムを共に過ごした仲間たち

<1回目>



<2回目>

